

# 関西学院大学 研究成果報告

2022年 3月 30日

関西学院 院長殿

所属： 文学部  
職名： 教授  
氏名： 久保昭博

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： フランス ） <input type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国： ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間 <input type="checkbox"/> 関西学院外留学（滞在国： ）
研究課題	フィクション理論に関する研究
研究実施場所	パリ第三大学ならびにフランス国立図書館
研究期間	2021年 5月 8日 ～ 2022年 3月 26日（約11ヶ月）

## ◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

2021年5月8日から2022年3月26日まで、フランスにおいて学院留学の制度を利用して研究活動を行った。今回の滞在において受入機関となったのはパリ第三ソルボンヌ・ヌーヴェル大学である。本来、私の留学期間は2020年4月から2021年3月までであったが、コロナウィルス感染拡大のために留学期間を一年繰り延べたのみならず、2021年3月下旬にはフランスが再びロックダウンとなったため、出発をさらに一月遅らせることを余儀なくされた。到着時のフランスは19時以降の夜間外出禁止に加え、大学の授業は全面的にオンライン、また劇場等の文化施設も閉鎖という状態であったが、フランス国立図書館は限定的に開館していたため、当初は主に図書館で研究活動を行った。また5月半ば以降は衛生状況が改善して行動制限も次第に緩和されたことに加え、ワクチン接種も広がったため（外国人でも無償で接種可能）、おおきな不自由を感じることなく研究活動を送ることができた。さらに9月の新年度にはセミナーやシンポジウムも再び対面が主流となったため、後述するようにセミナーやシンポジウム等の学術イベントに積極的に参加することが可能となり、研究者同士の交流を深めることができた。

具体的な研究活動ならびにその成果は以下の通りである。

・ジェラルド・ジュネット『メタレプシス』（G rard Genette, *M talepse, Seuil, 2004*）の翻訳。物語論の創設者として知られるジュネットが2004年に発表したこの著作は、彼が物語論の一概念として提案した「メタレプシス（転説法）」という修辞学の概念をフィクシ

ョン理論にまで拡大したものである。ジュネットの後期に属するこの著作は、シンポジウムでの発表をもとにした小著でありながら、物語論からテクストの「超越的」領域へと研究の場を広げ、また1990年代以降は分析哲学の影響下に独自の語用論的美学を展開したこの文学理論家の知的軌跡を理解するための入門書であると同時に、今世紀にはいって飛躍的に研究が進んだフィクション研究ならびに「ポスト古典的物語論」の潮流に呼応する野心的な一冊となっている。本書の翻訳は、フランスのフィクション理論の最前線を日本語で紹介するという私自身の研究プロジェクト（これまでジャン＝マリー・シェフェール『なぜフィクションか？』、慶應義塾大学出版会、2019年の翻訳がある）の一環でもあるが、この仕事は2022年3月に人文書院から刊行され、学院留学期間中に実を結ぶことになった。

・「**フィクションとフィクションナリティ国際学会 (Société internationale des recherches sur la fiction et la fictionnalité)**」における研究活動。パリ第三大学のフランソワーズ・ラヴォカ教授（今回の学院留学に際してのフランス側の受入教員）を代表とし、シカゴ大学のアリソン・ジェームズならびに私自身が副代表をつとめる本学会に関する研究活動は、今回の学院留学においても主要な目的の一つであった。本学会の重要な活動としては、以下の二つがある。1) **Fiction and Belief**と題したハンドブックの作成。ラヴォカ、ジェームズ、久保を共編者とするこの計画では、欧米を中心に、日本国内の研究者からの協力も得て、現実や事実とは異なる表象の様態として定義されるフィクションが、それでもなぜ人々の現実にかかわる「信」に影響を与えるのかという問題系をめぐって、文学、芸術はもちろん、哲学、歴史学、宗教学、人類学、認知科学等々の領域横断的アプローチを特色とする論集を2023年中に作成することを目指している。学院留学期間中には、各章の執筆予定者を集めたワークショップをオンラインで4回開催し、有意義な意見交換を行うことができた。2) **Impossible Fiction**と題した国際シンポジウムの組織。ラヴォカ、ジェームズ、久保をオーガナイザーとしてシカゴ大学で計画されていたこのシンポジウムは、2021年10月下旬という当初の日程こそ延期を余儀なくされたものの、75人の参加者（うち40人程度は対面での参加）を集めて2022年3月2日から5日の4日にかけて開催された。このシンポジウムでは、多領域にまたがる各参加者の発表の他、映画研究者のマレー・スミス、文学理論家のマリー＝ロール・ライアン、物語論研究者のブライアン・リチャードソンによる基調講演、現代フィクション理論の開拓者の一人であるトマス・パヴェルをかこむラウンドテーブル、現代フランスの作家ローラン・ビネとの座談会等が開催された。

・**科研費研究「近代におけるフィクションの社会的機能についての領域横断的研究」**のスタート。2021年度に採択された本科研費研究は、研究代表者である私自身を含め、日本国内の研究者9人からなるプロジェクトである。今年度は私自身がフランスに滞在しており、コロナ感染拡大のために日本への一時帰国も困難であったことから、対面での研究会の開催は実質的に不可能であった。そのため全面的にオンラインの形式で、2021年6月に自己紹介を兼ねた打合せ、10月に『フィクションの哲学』の著者である清塚邦彦教授（山形大学）、2022年2月にフランソワーズ・ラヴォカ教授、同じく2月にアリソン・ジェームズ教授の講演会を主に科研メンバーを対象として実施した。この連続セミナーにより、2022年度以降に共同研究活動を国内外で展開するための基本的な認識を共有することが可能になった。

・**EHESS（社会科学高等研究院）におけるセミナーの聴講**。2021年10月以降、旧知の研究者たちによって開催されている同研究院の複数のセミナーに参加し、現在のフランスにおける研究動向を把握した。とりわけジョン・ピアとフィリップ・ルッサンを共同主催者とする「ナラティブの遂行性」に関するセミナーならびにドミニク・デュプラとフィリップ・ルッサンを共同主催者とする「文学とデモクラシー」のセミナーが、一方では領域横断的物語論という観点から、他方では19世紀から現代までの政治と文学の関係という観点からフィクション理論を考察するという点において有益であった。

・**BnF（フランス国立図書館）での文献調査**。学院留学によるフランス滞在期間を通じて、BnFでは古典から現代にいたるフィクション理論ならびに文学理論に関する文献、そして20世紀フランス文学、とりわけ「証言とフィクション」という問題系に関連する文献を調査し、読み込むことができた。

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。